

『エデンの初恋』

著：朝丘 戾

ill：カズアキ

レンタルショップ『エデン』は、住宅街の片隅にひっそり煌々と輝いて佇んでいる。

「——いらっしゃいませ」

夜十時半。カウンター横にある出入り口の自動ドアを通過して、スーツ姿の男性が来店した。きちんと切りそろえられた清潔感のある黒髪と、知的に感じられる縁なし眼鏡。カウンターを横切って店の奥へすすむしゃんとした背中と歩きかたにも、若干の疲労はうかがえるものの厳格さがあり、堅物って印象を持つ。

彼はそのまま一直線に、迷いなく右奥の小部屋へのれんをくぐって入っていった。

数分後、カウンターにきた彼からすっとさしだされ、「ありがとうございます」と受けとったディスクは二枚。新作映画とアダルト作品。

「一週間レンタルでよろしいですか？」

「はい」

レンタル料金を告げたら、お金と一緒に会員カードをくれた。

柏樹透さん——俺が二年前にアルバイトを始める前から通い続けてくれている常連客だ。

おつりとカードを渡して彼が財布にしまい終えたのを見計らい、ディスクの入った袋を渡す。まっすぐ見あげて顔を間近で観察すると、眉のラインも瞼のカーブも唇のふくらみも、すべて定規をつかって描いたのかってぐらい綺麗に格好よく整っているのがよくわかる。

この人がたまにゲイ向けのAVを借りていくなんて、きっと世界中の誰ひとり想像しない。今夜のオカズは『ブレザーDKタクマ君のハジメテ』。初々しい美少年が好みっていうのも、俺ら『エデン』の店員ぐらいしか知らないんだろうな。

「……ありがとう」

たまに聞く声まで完璧に素敵で彼は、低くそう言って会釈し、身を翻して去っていく。

「またのお越しをお待ちしております」

俺もこたえて、ひろい背中が自動ドアを通り、暗い夜道に消えていくのを見送った。

「……要、いまのカッシーだったろ」

バイト仲間のイサムが小声で言って、あくびしながらカウンターに入ってきた。

金髪ウルフカットのやや派手な外見をしたイサムは、柏樹さんに“カッシー”とあだ名をつけている。

「うん、だった」

「また美少年借りてった？」

「てった」

「だよな。あの週末に又く率高えもんな」

「しーっ」

店内にお客さんがいるし、個人的な事情は知らんぷりするのがマナーだろ、と諷めるようにイサムを睨むと、フツと口端を持ちあげて笑われた。

「ばれなきやいいじゃん。又きたくなるのも生理現象で、恥じることでもねーしな」

目を細めてにやりとするイサムは同じ歳なのに無駄に色気があって、その蠱惑的な瞳に捕らわれるとこっちは怒りも容易く呑まれてしまう。デリバリーホストの経験もあるイサムのオトナな発言には、妙な説得力もあった。

「でもまじでおもしろいよな。カッシーってスーツとか身につけてるものとか見ててもそこそこいい暮らししてると思うんだよ。おまけにあの顔面偏差値の高さ……なのにゲイっていうね。いったい何人の女が泣いてるのやら……ひははっ。世の中奇妙におもしろくまわってるよなあ」

「おもしろいのかな、それ」

「おもしろいよ。カッシーの金と容姿に惹かれるクソ女は泣きを見るってわけさ。ざまーねえ」

イサムは老若男女問わず抱いたり抱かれたりしていて、性指向に偏見を持っていない一方で、どういうわけか一部の女性に対する嫌悪が激しい。

「ほんとにお金持ちなのか、ゲイなのか、俺ら柏樹さんのことなにもわかんないじゃん」

反論すると、呆れ返ったようすで「はあ？」と肩を竦められた。

「ばあか、ゲイに決まってるんだろ。めっちゃ頻繁に美少年ゲイビ借りてくんだぞ。女のAVは一度も借りてったことがない。女じゃ又けねえからだ、あからさまだっつの」

「女性、駄目なのかな……」

「ノンケがゲイビを何年もレンタルし続けてる事情ってなんだよ」

「想像つかないけど、でもいろんなお客さんがいるからさ」

「フン……まあな。思いもよらなかったやべえ性癖の奴だっごまんというしな。俺もデリホスしてたって言うとビビられるし」

「ビビんの？」

「ん？」

「失礼だね、デリホスだって立派な仕事なのに」

「……ふふん」

にやけたイサムにいきなり腰をくすぐられて、「やっ」とふたりに笑ってすこしじゃれた。

「なら、カッシーって実際のところどんな人なのかねえ……」

勝手な妄想で作りあげた“カッシー”が、俺らのなかでまた未知の存在に戻っていく。

眠そうなイサムがでっかなあくびをした瞬間、ちょうどお客さんがやってきてカウンターに数枚のディスクがおかれた。

「ありがとうございます、一週間レンタルでよろしいですか？」

イサムとそろって背筋をのばし、にっこり営業スマイルで仕事を再開する。

バイトが終わると自転車に跨がり、コンビニに寄ってからひとり暮らしのアパートへ帰った。アパート前の駐輪場に自転車をとめて鍵をかけ、一〇三号室の自分の部屋に行く。

玄関へ入ってすぐ右手にあるキッチンを通りすぎて奥の自室へ移動すると、灯りをつけてリュックをおろした。コンビニ袋も中央のテーブルにおく。むんとする部屋の換気をしたくて、ベランダのガラス戸も半分あける。

九月になって秋がきたというのに、まだ蒸し暑い。ガラス戸をあけていたら虫が入ってくるからクーラーを入れたいけど、大学生のひとり暮らしでは贅沢もできない。電気代節約だ。

扇風機は風呂をあがってからつけていい、とマイルールがあるので、うちわをとってぱたぱた扇ぎ、コンビニで買ってきたペットボトルのスポーツドリンクを飲んだ。

「んっ……あっ、あっ、ひゃあっ、せんせ、い……ぎもぢいっ……」

鈴虫の鳴き声が響き渡る秋の夜のもの悲しい静謐に、とんでもなく不似合いな工口い喘ぎ声がまざって聞こえてきた。ああ、観てるな柏樹さん……。

イサムにも誰にもなんとなく言えずにいるんだけど、柏樹透さんはアパートの俺の部屋の上、二〇三号室に住んでいるのだった。しかも『エデン』で借りたAVを、俺みたいに部屋のガラス戸を開けた状態で鑑賞しているらしく、全部だだ洩れ、まる聞こえ。

柏樹さんは俺が下の部屋に住んでいることも、外にAVの喘ぎ声が洩れ聞こえていることも、たぶん知らないんだろうな。聞かせたい性癖……とかなのかな。いやまさか。

引っ越してきたとき、俺は上の階の柏樹さんに挨拶をしなかった。生活していてすれ違ったこともない。なぜ俺が彼のことを知っているかという、このガラス戸からアパートの裏庭の花壇横にある共同ゴミ捨て場が見えて、ゴミを捨てて出勤する彼を見かけるからだ。

柏樹さんを最初に知ったのもそのとき。朝、大学へいく準備をしていたら、とても格好いいスーツ姿のサラリーマンがゴミを捨てて出勤していった。

スズメが鳴くうららかな春の朝に、白い朝日を浴びてゴミ袋をおいた彼の気難しげな横顔は俳優ばりに整っていて、このアパートにはあんな男前も住んでるのか……と眠気も飛んだ。

それで『エデン』でバイトを始めたら彼がきた。映画好きなんだ、と心のメモ帳に記しているとさしだされたのは美少年がおしりをだしているAVだったから、口から魂が抜けかけた。

家に帰って確認したポストには、自分ちの真上の部屋に会員証とおなじ『柏樹透』の名前。ゲイなのか、という困惑にまざっていた恐怖心は、二年経ったいまでもうまく説明できない。ゲイである事実を嚴重に隠して生きてきた俺に、神さまが唐突に押しつけてきた仲間——そう思ったら、“好みの男だろ”と見透かされて嘲笑われているような、焦燥と恐怖に苛まれて混乱した。

おまけに彼がAVを観ている時間まで、こうやって洩れてくる喘ぎ声とともに共有させられている。シている姿を想像するな、っていうほうが無理だ。部屋だっておなじ間取りのはず。こちらへんに座って、テレビを前にしてこすってるって、結構鮮明に想い描けてしまうよ。

妄想する。ドーベルマンみたいに凜々しく厳格そうな柏樹さんの頬が赤く昂奮して、吐息を洩らすセクシーな表情……俺は怖がってどきどき緊張しつつも、キジトラ猫ばりのクールさを装って“自分でシて気持ちいいの？”って訊く。すると、蕩けた瞳をこっちへ色っぽくながした彼が俺を見返して“……抱けるなら、きみがいい”って求めてくれる……——なんて。

しかし現実には妄想に遠く及ばない。

その証拠に、週末の彼の部屋に数ヶ月前から女の人がかかるようになっていた。しっかり一泊して日曜日に帰っていく。その人も小柄で美人の綺麗な女性で、美少年ならぬ美少女って感じ。ふたりで仲よさそうに外出していく姿も何度も目撃した。

会話は聞こえずとも、彼女が『透さん』と呼ぶ声だけは耳にしたこともあって、どうやら妹とかでもなさそうだった。ゲイを隠して女性とつきあっているのか、はたまたバイで、ひとりで多くときは男相手の性欲を発散しているのか……いくら考えてみても、答えは闇のなか。

本当はこの二年間、なにかきっかけさえあれば声をかけてみたいと思っていた。神さまに“いい加減、妄想ばかりしないで前進しろ”とスパルタ教育されている気もしたから、この不思議な出会いにぶつかってみよう、と。でもいまは、恋人になりたがるのは当然無理な話で、ゲイ仲間の友だちになりたいという願いさえ、叶う気がしない。

「あっあっ、せんせっ……せんせええっ……」

タクマがハジメテを捧げたのは教師か。学生のころ男に抱いてもらっているだけじゃなく、柏樹さんのオカズにまでなっていると羨ましくすぎる。

ふん、とうちわをぱたぱた扇ぎ、スポーツドリンクを一気に飲む。くだらない妄想をするのはやめよう。親父の真似事みたいな、こんなばかげたことをするのは。

はあ、とため息を放った夜のベランダに、鈴虫がリンリン鳴いている。

土曜日もほとんど『エデン』のシフトを入れている。だいたい午後から。

「要、おまえデートとかしないの。こんな昼間っから働いちゃってさ」

返却されたディスクを棚に戻して整頓していたら、隣にきたイサムに肘でつつかれた。

「イサムもだろ」

俺もつつき返して作業を続ける。

「俺は散々遊び疲れてひとり満喫中なだけ。可愛い処女ちゃんの要とは違ーぜ？」

「うっさいなも〜」

『エデン』は土曜の昼もしずかだ。近ごろは映画もネットで観る人が多いし、当然かなと思う。窓からゆるい日ざしがおりて、店内も明るくゆったりしている。BGMは店長が好きなお洒落な洋楽。ディスクをならべる音。足音。たまに聞こえるかすかなしゃべり声。

「出会い系アプリやるとか二丁目いくとかすりゃいいじゃん、なに怖がってんだよ」

イサムも俺が持ってきたディスクの束から数枚抜きとり、ケースに入れて戻していく。

「怖いよ。出会い系なんか、相手の腹が見えないもん」

「可愛いこと言っちゃって。勇気なくても性欲はあるくせに」

「あるけど、好きな人としたい」

「あれか、王子さまのお迎えを待ってるってか？ 女子かよ」

イサムとは通っている大学も違うし、『エデン』で会うだけのバイト仲間でしかないけれど、自分の本当の姿を、ありのままさらしてつきあっている唯一の相手だ。

人生で初めてイサムには言えた。イサム自身がオープンで、偏見もないうえにセックス経験まであったから。『ゲイもバイも全然気にしないぜ』と言うイサムの言葉に、口先だけの偽善や同情じゃないんだ、と信頼が芽生えたら、するっと吐露していた。俺も、とたったひとこと。俺も——これさえ言えなかったんだな、と愕然としたのも苦々しく憶えている。

「要、世界も心も狭かった中高生のころとは違うだろ。行動してみろよ」

空ケースにディスクを入れてイサムをふりむいたら、にっ、と笑顔をむけられた。

「それとも俺が抱いてやろうか？ ふっふふ」

「ごめん、イサムをそーゆー目で見ただことないや」

「ンだと。俺超モテんだからなっ」

軽く脚を蹴られて、声を殺して笑った。イサムもくっくと笑う。

「すみません……イサム君」

ふいにイサムの右肩に背後から手が乗って、視線をむけるとお客さんがいた。

「イサム君……その、きみが持ってる新作のBlu-ray、いいかな」

拳動不審で視線も泳ぎまくっているぼさぼさ頭のおっさんが、落ちつきなくゆらゆら揺れながらイサムの手もとにあるBlu-rayをしめす。

イサムのことを追いかけてまわしてるやばい客だった。

「あー……はい。これっすね。ほかに借りるのなければ、レジへどうぞ」

「はい……はい、お願いします」

イサムが俺に真剣な目で“とっとと帰してくるわ”みたいな合図を送ってくる。そして彼をカウンターのほうへ誘導していった。

前に教えてもらった。前山さんという彼は、イサムがデリホスをしていたころのお客さんで、『エデン』で偶然再会してしまったんだ、と。デリホスでも仕事って枠を勘違いして入れこむタイプだったから、『厄介な客に見つかった』と唸っていた。

微妙にストーカーチックで、こっちが冷たくしようものならキレてなにをするかわからなそう……っていうのはさすがに失礼だけど、店長にも相談して警戒しているお客さんなのだった。

イサムが接客しているようすを心配して、それとなく見守りつつ仕事を続けた。「ありがとうございましたー」と聞こえてきて、自動ドアから前山さんが帰っていく気配を察知すると、何事もなく終わったことにほっと胸を撫でおろす。

イサムががに股でてれんてれん歩きながら戻ってくる。

「おつり渡したとき、めっちゃ手え握られたわ」

「まじ？ 平気？」

「へーき。つきあいたいとか想ってくれてんだろ？ なあ～……むしろ告白でもしてきてくれれば、ふって綺麗に終われるのにな」

「だね……こっちから“こないでください”とは言えないもんね」

「——ま、勝手に変態にしてキモがっちゃ悪いよな。雰囲気はやべーっちゃやべーけど、いまんとこ一途な女子高生の片想いと変わんねーし」

「じよ、女子高生か……」

たしかに、イサムは女子高生にも追っかけられていたことがある。俺まで『イサム君のメアド内緒で教えてください』と可愛い顔で、怖いこと言われて、どんびいた。

「全部愛だぜ、愛」

イサムが歯を覗かせて、ひひひっ、と笑っている。

自転車をこいで、今日もコンビニに寄ってからアパートへむかった。

駐輪場に自転車をとめて鍵をかけると、アパートの二階の部屋のドアが外灯の光に照って、闇夜にぼんやり浮かんでいるのを眺めた。……柏樹さんは今夜、家にいるのだろうか。

——王子さまのお迎えを待ってるってか？

……あ、そういえば何日もポスト確認してないや、と我に返ってアパート横のポストの列から手紙やチラシをとったあと、そそくさと部屋へ帰った。

自室へ入って、いつものように灯りをつけてリュックと手紙をおき、ガラス戸をあける。

うちわで顔を扇いでドリンクを飲みつつ、テーブルの前に座ってポストに入っていたチラシをゴミ箱へぽいぽい捨てた。手紙は支払い関係とか、店のDMとか……ん？ ハガキ？

珍しく手書きの文章が綴られたハガキがある。最近連絡はほとんど電話とメールで事足りているから、ハガキや手紙をくれる相手など思いつかない。

「誰？ 母さん？」と思わず口にしながら読んだ。

【残暑お見舞い申しあげます。元気ですか。先日同窓会で、おまえが東京にいることを知りました。ごめんな、住所も勝手に聞いたよ。こっちに帰るときは連絡ください。また遊ぼう。

あんな別れかたになってすまなかったと後悔してる。好きだと思ふ気持ちの種類が違った。

でも俺はいまも友だちだと思ってるよ。草壁 剛】

「えっ、誰？」

なんのこと!? と頭上に疑問符が飛びまくって、焦ってハガキを裏返したら『柏樹透さま』とあった。柏樹さん宛て……——あ！ 郵便屋さんがポストの上と下を間違えたのか！

「まじか……」

どうしよう、だってこれって男友だちでしょ。柏樹さんの秘密をまたひとつ知ってしまった。一方的に、勝手に。

だから、つまり、柏樹さんは、男に告白した過去がある……って、ことだ。

——要、世界も心も狭かった中高生のころとは違うだろ。行動してみろよ。

……中学のとき、学校で『先輩にホモがいる』と噂がながれて一時期お祭り騒ぎになった。

“まじか、誰だ”と男子も女子も興味津々で、相手を特定するとまた“あの先輩、見かけたことあった〜”“友だちに告ったらしいよ”“つきあえると思ったのかな？”“男同士とかキモい〜”“てか男になんで勃つの!? ウケる!”と、声のでかい人たちが嗤って吊るしあげた。

先輩がその友だちを三十センチ定規で怪我させて転校していったあとも、みんなの好奇心は冷めるところかさらにふくらんで、“愉快的スクープだ”と喜ばれていた。

俺が意識して“自分”を隠すようになったのは、あの事件がきっかけだ。ああなるんだ、と思っ

たら、他人に心をひらくのも恐ろしくなった。どんなにいい人だろうともノンケ相手には絶対カミングアウトしたくない。そうやってずっとモブになってひっそり生きてきたんだ。

イサムに先輩の話をしたら、激怒したし心底呆れもした。『いくらなんでもまわりの奴らがガキすぎんだろ』と味方になってくれた。

——おまえもだぞ。そんなばかな奴らに傷つけられるこたねーだろ。気にすんな、純なお子さまだけ。

このハガキ……。ポストに入れなおしておけば、それですむことだ。けど直接渡しにいけば柏樹さんとの関係を変えられる可能性が高くなる。

いままで、なにもできなかった。だけど知っている。自分が動かなければ始まらないこと。

このハガキからも怯えて逃げたら、心を閉ざした中学生のころのまま、また明日も明後日も自分を隠し続ける日々を生きて、モブとして、しずかに孤独に死んでいくことになるんだ。

——行動してみろよ。

渡しにいつてみようか。渡しにいつて、俺の存在を——。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>